SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

社会科の主張

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 勝又, 悠太, 尾崎, 弘剛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027140

社会科の主張

勝又悠太　尾﨑弘剛

１　教科で育みたい人間像

私たちは，社会科を「社会的事象の追求を通して『社会の中でどのように生きるか』について考えをもつ教科」であると考えます。「社会」とは，家族や地域，国家，世界など，何らかのつながりをもった人々の集まりを指します。そして，「社会的事象」とは，社会における現在や過去の人々の営みのことを指します。このように空間的にも時間的にも様々な社会的事象にふれ，そのよさや問題点，またはそれに携わる様々な人々の考えを吟味しながら，よりよい社会のあり方を追求することを，社会科の授業で実践しています。私たちは，このような営みを授業で巻き起こすことを通して，単に社会に適応して生きる人ではなく，よりよい社会のあり方を追求し続ける**「社会を創る人」**を育みたいと考えています。

グローバル化の進展やＡＩ時代の到来など，人々の生活や社会の変化が激しい時代を迎えています。多様性を認め合う動きがある一方で，価値観の違いから対立が表面化し，合意を導き出すことが困難な状況も見られます。そのような状況であっても，よりよい社会を自分たちの手で創りあげていくために，自分以外の人間が重視することやその人が置かれた立場を理解したうえで，すべての人々にとって最善の結論を導こうとすることが大切だと考えます。

子どもたちが社会に見られる課題を自分の問題として捉え，「自分に何ができるだろうか」「こんな社会にしていきたい」という思いや意志をもち，すべての人にとってよりよい社会にしていくために行動する**「社会を創る人」**に成長していくことを，私たちは願っています。

２　教科ならではの文化

「社会を創る人」を育むためには，子どもたちが「社会科ならではの文化」を味わう経験を積み重ねることが必要であると考えます。「社会科ならではの文化」とは，**「様々な解釈の仕方や多様な価値観を尊重しながら，『すべての人にとって最善の社会の姿』を創りあげていく営み」**と捉えています。価値観や考え方の違いが表面化しやすい現代社会だからこそ，様々な視点や立場から物事を考え，すべての人にとって最善の結論を導き出そうとする営みに参加することが大切でしょう。

このような営みを巻き起こすためには，一人一人が社会の問題を自分の問題として捉え，よりよい社会像を追求することが必要不可欠です。そして，誰にとってもよりよい社会を創るためには，多様な他者とかかわりながら，最善の結論を出そうとしなければなりません。多様な他者とかかわる中で，自分だけでは気づくことができなかった視点から捉えたり，異なる立場に立って考えたりすることで，公正な判断や，より合理的な結論を導くことができます。その過程で対立や解釈のズレが生じることもあるでしょう。そのような場合には，考えの根拠や互いの価値観について語り合い，相手の見方や考え方に対する理解を深めることで，互いが納得できる社会の姿を創りあげたり，新たな社会の姿を見いだしたりすることにつながります。また，互いの価値観を尊重し合うことで，共生していく社会の姿にたどり着く場合もあります。

以上のような**「様々な解釈の仕方や多様な価値観を尊重しながら，『すべての人にとって最善の社会の姿』を創りあげていく営み」**に参加し，その経験を重ねた子どもたちは，自分に何ができるのかを真摯に考え，実際に行動したいという思いをもつことができるでしょう。自ら積極的に社会に参画しようとする姿は，「社会科ならではの文化」の中を生きる最終的な姿であると考えています。

３　授業づくりで大切にしていること

子どもたちが「社会科ならではの文化」を味わうためには，様々な社会的事象を自分事として捉え，「私にも関係があるかもしれない」という思いを抱くことが欠かせません。そのために，**現実の社会と自分とのつながりを感じられるような題材を開発すること**を大切にしています。子どもたちは，追求しがいのある魅力的な題材との出会いによって，解き明かしたいと思える「問い」を共有するでしょう。そこで生まれた「問い」が，多面的多角的に追求できる「問い」であることや，追求する活動を通して解釈の違いやズレが生まれ，価値観について語り合うことにつながる「問い」であることが重要だと考えます。

問いの質を吟味するとともに，**子どもたちが視点を明確にして，多面的多角的に追求していけるような構想上の手だてをうつこと**を大切にしています。そして，子どもたちの対話によって，よりよい社会の姿を創りあげる場面では，授業者は解釈のズレや価値観の違いが焦点化されるように子どもたちとかかわり，さらなる対話を促進し，考えの根拠を互いに理解できるようにします。

私たち授業者も，社会を創る人として，社会を創りあげる営みに参加していきたいと思っています。